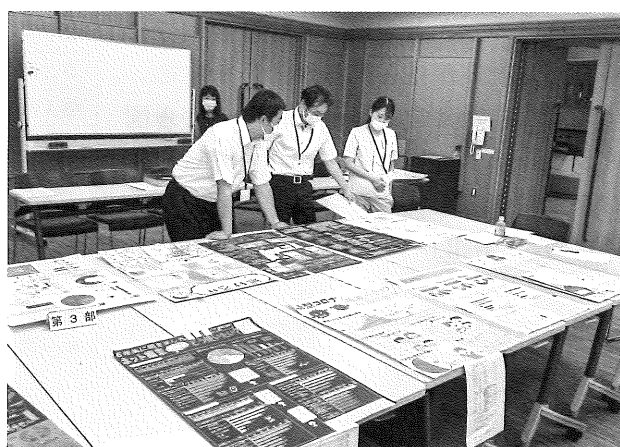


# 令和4年度 研究助成者 教育研究論文

令和5年度 統計グラフコンクール県審査会の様子



# 学ぶ意味を実感し、自己の生き方やよりよい社会創りに歴史学習

～平和と持続可能性の視点から学ぶ「近世」の授業を通して～

静岡市立東中学校 尾崎 弘剛

## 1 テーマ設定の理由

現行の学習指導要領では、生徒が学ぶ意味を実感し、自己の生き方やよりよい社会創りにつなげる学習を実現することが求められている。世の中のできごとや人々の営みを対象とする社会科は、その中心的役割を果たすものとする。しかし、いざ歴史的分野の授業を行おうとすると、その難しさに直面する。近代の歴史学習（例えばアジア太平洋戦争の学習）を通して、多くの生徒は歴史を学ぶ意味を「過ちをくり返さないため」「先人に学ぶため」と答え、自己の生き方やよりよい社会創りにつながる考えをもつことができる<sup>1)</sup>。一方、近世以前の歴史学習では、このような実感を得にくく、このようなねらいをもった授業実践も少ないと推察する。本研究では、近世においても、生徒が歴史を学ぶ意味を実感し、自己の生き方やよりよい社会創りにつなげたいと思える歴史学習が可能なのかに関して考察する。

## 2 研究方法

近世（安土桃山時代～江戸時代）において、二つの単元を構想して授業実践を行い、問いに対する単元末のふり返りから、自己の生き方やよりよい社会創りにつながる記述が見られるかを分析する。

筆者は、近世を、混乱した時代から国内が統一に向かい、やがて平和で安定した世の中を実現した時代と捉えた。そのため、「平和」や平和の「持続可能性」という二つの視点から追究できるように単元を構想した。単元の概要は右の通りである。

<単元1>戦国の世から天下統一の過程で、どのような施策が行われたかを調査することを通して、平和な世の中を築く上で大切にすべきことを考察する単元【視点：平和】	
第1次	戦国大名はどのようにして、領国を支配したのだろうか。
第2次	他の戦国大名でなく、信長が天下統一に近づけたのはなぜだろう。
第3次	なぜ、秀吉は太閤検地と刀狩を行ったのだろうか。
第4次	なぜ、江戸幕府は泰平の世を築くことができたのだろうか。
<単元2>天下泰平の世を持続させるために、どのような施策が行われたかを調査することを通して、持続可能な社会を築く上で大切にすべきことを考察する単元【視点：平和、持続可能性】	
第1次	幕府や大名は、百姓をどのようにに統制したのだろうか。
第2次	幕府や大名は、どのようにして産業を発達させたのだろうか。
第3次	江戸時代には、どのような文化が開花したのだろうか。
第4次	(享保の改革・田沼の政治・寛政の改革のうち) どの改革が優れているのだろうか。

### 【研究仮説】

歴史を考察する視点を明確にして単元を構成し、授業実践を行うことを通して、生徒は歴史を学ぶ意味を実感し、自らの生き方やよりよい社会創りにつなげようとする姿勢や態度を育むだろう。

## 3 研究実践のようす

### (1) 単元1の授業実践

単元1では、室町時代後半が応仁の乱や一揆などにより混乱した時代であったことを想起させつつ、やがて江戸時代が265年間という長きにわたる安定した時代となったことを確認し、「泰平の世（安定した社会）を築くために、大切なことは何だろう」という単元を貫く問いを共有した。第4次「なぜ、江戸幕府は泰平の世を築くことがで

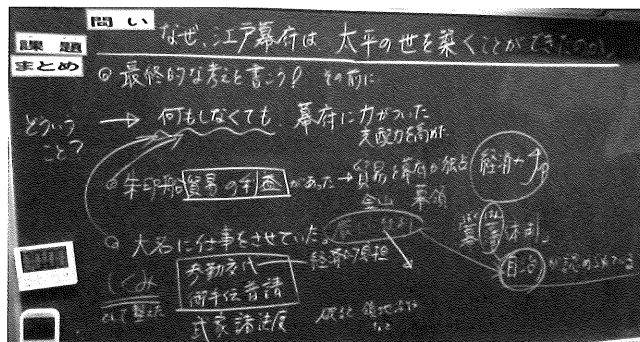


図1 問いに対する考えをまとめる直前の板書

きたのだろう」では、幕府の支配のしくみやその巧みさを多面的・多角的に考察するために、ジグソー学習を行った。具体的には、①大名配置の工夫と幕領②武家諸法度の制定と参勤交代のしくみ③禁教の徹底と貿易の統制という三つの内容を班で分担して調査し、その内容を伝え合い、問いに対する考えを対話する場を設けた。対話の中で「幕府は敵対する大名やキリシタンに、武家諸法度や大名配置、禁教を徹底することで、反発できない状況に追い込んだ」「幕府は貿易を独占し、経済力を高めたり、軍事力を高めたりして、刃向かえないようにした」「厳しく制限された中でも自治を認めた幕藩体制であったため、反乱を起こす人も少なかった」など、安定した時代を築くための要素を見出していった（図1）。

## (2) 単元2の授業実践

単元2は、幕府の支配体制が確立したことで経済や文化が発展し、豊かで持続可能な生活が営まれた時期である。その一方で、財政難と度重なる自然災害に、幕府は新たな対応を余儀なくされた。そこで、持続可能性に注目し、「泰平の世を持続可能にするために、大切なことは何だろう」という単元を貫く問いを共有した。第4次では、改革政治の内容を調査した上で、どの改革が優れているのかに関して対話する場を設けた。生徒は「米中心の改革か、商業中心の改革か」「財政難の解決と庶民の不満解消のどちらを重視するか」について対話し、安定した世の中を継続する優れた改革のあり方について自分の考えを深めていった。単元末には、単元を貫く問いの答えを導くために、「泰平の世を続けるための要素を図式化してみよう」となげかけた。政治面（法・しくみ・統制と自治）や経済・産業面、文化面（学問・教育・娯楽）など、これまでの学習をふり返って関連性を意識しながら、図を作る姿が見られた（図2）。

さらに、単元全体をふり返る場を設けた。平和や持続可能性という視点で近世という時代を見つめ、そのことを現代社会のできごとや問題にあてはめて考えようとする記述が見られた（図3）。

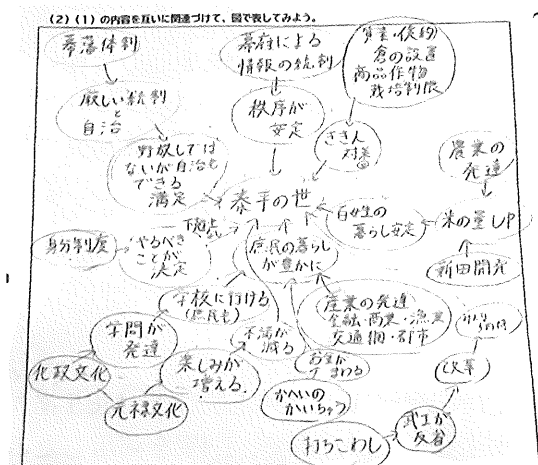


図2 要素の図式化の一例

・近世では、平和や安定した社会を持続させる方法について学んだ。きまりを作って人々を統制したり、そのきまりがある中でも自由に豊かな生活を送れるような政策をしていた。また目安箱の設置や飢饉対策などの人々不安や不満を無くすために寄りそった政策もあった。これは学校生活や今の社会にも必要だと思った。今は多様性の時代なので、いろんな人の声を聞き入れて受け入れることが大切だと思うからだ。また田沼の商業という新しい視点で政策を取り入れていたため、今のまま止まらないためにもこれからもそういったことが必要だと思った。

図3 単元末のふり返りの一例（原文のまま）

## 4 成果と今後の課題

本研究で、視点（平和・持続可能性）を明確にして単元を貫く問いを追究することを通して、生徒は「平和で安定した社会を築くために大切なこと」に関して、歴史の事実を根拠に考察を深め、現代社会に類推して考える姿が見られた。さらに、歴史的事象の事実的な知識の習得に留まらず、事象間の関連性をつかんで概念的な知識を習得することで、近世を大観することにもつながった。以上のように、本実践は生徒が歴史を学ぶ意味を実感し、自らの生き方やよりよい社会創りに生かそうとする姿勢や態度を育む上で、一定の成果をあげた。「戦争と平和」が現実の問題となっている国際情勢の中で、「平和」という視点から歴史を見つめて学ぶことは、一層重要性を増している。近世以前の歴史学習においても、視点を明確にして学ぶことを通して、生徒にどのような歴史学習が成立するか研究していきたい。

1) 拙稿（R2）「平和で民主的な社会の創り手を育む歴史の学びー単元『なぜ、日本人は太平洋戦争に向かったのか』の授業実践を通してー」『令和2年度静岡県教育研究会社会科教育研究部夏季研究大会』

# GIGAスクール構想の一般化

～タブレットの普段使い～

三島市立南中学校 野口 厚

## 1 はじめに

文部科学省と経済産業省の御尽力でにわかにICT化が進捗し、学校ではGIGAスクール構想が拡大している。GIGAの中のIはイノベーションを示し、硬直化した仕組みに新しい息吹を入れて、変革をもたらすことを意味する。過去、学校には家庭に置いていない進歩的な機器（高額のアオーディオなど）があり、子どもながらに目を輝かせて見ていた。いつしか教育予算が削減され、学校にしかない物（トイレなど）は特別な使い方を学ばなければならないなど、ガラパゴス化してしまった。そのような状況下、逆転劇をもたらしたのがGIGAスクール構想である。子ども一人一人にタブレットが配付され、多くの子どもたちが高性能の機器を手にすることができた。このタブレットを日常生活で他の文房具と同じレベルで使うようになることが真の「定着」であると考えている。

## 2 テーマ設定の理由

本校は当初、市教委から旧型のタブレットをレンタルするなどして、令和2年12月からGIGAスクール構想を開始した。令和3年2月に全生徒に高性能のタブレットが配付されると急進的にGIGAスクール構想を推し進め、令和3年度は国立教育政策研究所の実践協力校、及び三島市教育委員会の研究指定校になった。現在、多くの生徒がタブレットを使った個別最適な学びと協働による授業を通して深い学びをしている。しかしながら、GIGAスクール構想を授業の範疇だけで留めては、イノベーションは実現しないと考える。信州大学教育学部の佐藤和紀准教授の講話を拝聴した際、タブレットを文房具の如く「普段使い」することを学んだ。そこで、研究テーマを「GIGAスクール構想の一般化」とし、生徒がタブレットを休み時間に普段使いする姿をめざすことにした。

## 3 研究実践のようす

### (1) 令和2年度の実践

令和2年12月、1人1台端末より以前、旧型のタブレットを市教委からレンタルし、まずはICT推進委員が担当する数学の授業で活用した。ネットワークはWi-Fiが未整備だったので、LTEを利用したポケットWi-Fiを使った。数学の教材は「座標」で、担当者が独自に制作したプログラムを生徒に配信した。ゲーム感覚で座標の学習ができたので、これまでにない主体的な活動が実現した。このタブレットによる効果を他教科で活用できないかということで、音楽科で扱っている「鑑賞」に焦点を当てた。この教材は生徒の主体的な活動が最も期待できないので、適当な研究媒体である。令和3年1月、音楽の授業で研究授業を行った。生徒はタブレットからイヤホンで音楽を鑑賞し、感じた内容をタブレットに入力後、グループになって共有し、学びを深めた。令和3年2月、市教委から1人1台端末のタブレットが配付されると、昼休みに、予定を入力する生徒やイラストを描く生徒の姿が見られ始めた。この実態から来年度は昼休みにタブレットを使って学習する姿や生徒会活動で活用する姿を期待することにした。



音楽の研究授業の様子

### (2) 令和3年度の実践

令和3年度は全教科の授業でタブレットを活用した授業を展開することで、生徒は個別最適な学びと

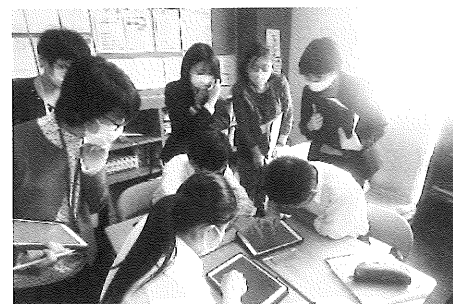
協働による深い学びをしながら、タブレットの活用スキルを高めていった。個別最適な学びでは、教員は生徒が入力した内容をタブレット上で一人一人にアドバイスを入れるが、これによって生徒に学びを延長する意識が生まれる。また、協働では、教員は生徒が各グループで話し合いができるように画面を共有するが、これによって生徒はお互いに考え方の違いや交流することの楽しみを感じる。これらの教育効果を教員間で共有するために、令和3年11月、社会科の研究授業を行った。教材は「市政」で、環境や教育、建設などの分野について、外部講師の市議会議員からも聞き取りをしながら、タブレットを使って自身の考えを深めていった。生徒は授業で培ったスキルを使って、昼休み、学習、生徒会活動、部活動など様々なカテゴリーでタブレットを工夫して活用するようになった。



社会科の研究授業の様子

### (3) 令和4年度の実践

令和4年度は昼休みに見られた主体的な活動を家庭にまで拡大しながら、タブレットの「普段使い」を充実することにした。また、この普段使いを夏季休業中も継続するために、毎日、希望制の補習を計画した。これらの普段使いを拡大するためのベースは、タブレットを有効に使った授業の工夫改善なので、令和4年10月、英語で研究授業を計画した。教材は「好きな人」で、生徒は興味深く取り組み、自身の考えを表すための英作文に力が入った。教員は生徒一人一人の英作文にタブレット上で個別指導をし、その後、生徒はグループ内で画面共有をして英作文を比較修正した。これらの授業におけるタブレットの有効活用が、昼休みや家庭におけるタブレットの普段使いに繋がることを期待した。



英語科の研究授業の様子

## 4 成果と今後の課題

### (1) 令和2年度の昼休みの変化

授業で培ったタブレットのスキルを日常生活で「普段使い」することを成果とした。そのエビデンスは昼休みの生徒の姿の変革である。令和2年度は12月からタブレットを活用したばかりであったが、明日の授業予定を記入したり、学級担任がホストになってTeamsで通信したり、昼の放送の原稿を作成したりする姿が見られるようになった。



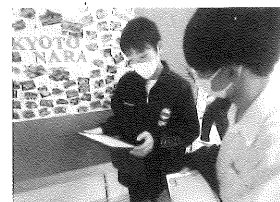
### (2) 令和3年度の昼休みの変化

令和3年度はタブレットを授業で使う頻度が増したので、一層、生徒の昼休みの姿に変革「タブレットの普段使い」が見られた。授業の予習復習や宿題などの学習面ばかりでなく、生徒会活動では生徒会本部が集会を企画したり、各専門委員会で資料をあらかじめMetaMojiClassRoomで配付したりするようになった。また、部活動でも練習メニューを配信したり、試合の録画を見直したりする姿が見られるようになった。



### (3) 令和4年度の昼休みの変化

令和4年度はタブレットの普段使いも安定期に入り、様々なアプリを利用するようになった。昼休みに学習面で「Qubena」でAI問題集、「mikan」で英単語、「漢検」で漢字練習、「PhET」で実験シミュレーション、「StarWalk」で星座観察の他に、日常生活で「Teams」、「MetaMojiClassRoom」、「GarageBand」などを使う姿が見られるようになった。



## 令和5年度編集主任

研究部名	編集主任	地域・所属校	研究部名	編集主任	地域・所属校
国語	服部 功美	静岡・清水八中	道徳	名倉 伸枝	磐周・福田小
書写	川口 史記	静岡・長田東小	特別活動	山本 琢真	富士・岩松小
社会科	杉山 高久	小笠・城東中	学校保健	古屋 美礼	沼津・門池中
数学	菊野慎太郎	静岡・附属静岡中	学校図書館	佐藤 絵巳	静岡・南部小
理科	中本 裕介	静岡・観山中	情報	川相 泰成	志太・豊田中
音楽	増田 琴美	小笠・堀之内小	特別支援	栗田 真和	駿東・玉穂小
美術	萩田 昌人	小笠・(掛川)北中	生徒指導	大石 茂人	榛原・川崎小
保健体育	黒川 正人	静岡・豊田中	学校給食	大場小有実	静岡・清水船越小
技術・家庭科	池谷 仁	磐周・豊田南中	事務	川上 由香	榛原・吉田中
英語	加藤 美帆	富士・北山中	小規模校	影山 豪	静岡・両河内小中
生活・総合	多田 五郎	静岡・清水辻小			

## 編集後記

本冊子は静教研三大事業の一つである「研究成果刊行」の中心となる刊行物で、「実践校の追究」（地域実践校の取組）、「研究部の追究」（各研究部の代表実践報告）、「研究助成の論文」（研究助成者の論文）の3部で構成しています。

自身の実践を書いて発信することは、教師にとって大事な研修です。ねらいと仮説、手立て、実践の具体、検証に一貫性をもたせ、成果・課題を明確にして、論文や報告書としてまとめることで、さらに自身の実践力が高まり、学校教育の質の向上が図られます。今回、執筆して下さった先生方の実践は、どれも目の前の子どもたちの実態を捉え、より良い方向に導こうとしているものばかりで、実りの多い冊子となりました。

コロナ禍で、他校の実践から学ぶことができにくかった状況から、本年5月にはコロナウイルスが第5類に引き下げられ、研修の機会も増え、仲間の実践に触れることも増えてきました。本冊子が会員の皆様にとって、多くの優れた実践の出会いの場となり、日々の取組の更なる充実・発展の契機となれば幸いです。

ご多忙の中、原稿を執筆して下さった皆様、実践にかかわられた皆様、各研究部の部長・事務長・編集主任の皆様、出版にご協力下さった静岡教育出版社の皆様に感謝申し上げます。

（文責：静教研事務局）